第27号　20円
昭和47年6月25日

内　容

現代社会と法…… 1
理事会…… 2
第43〜46回大学共同セミナー… 4
国際学生セミナー…… 6
第5回大学教員懇談会… 8
私の大学生活とセミナー・ハウス… 8
"大浜岬公園"完成…… 9
利用状況……11

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人 大学セミナー・ハウス
《所在地》
東京都八王子市下柚木
電　話　0426-76-8511〜2
《東京事務所》
東京都中央区日本橋本町3の3
三井銀行本町支店ビル5階
電　話　東　京(270)4431
振替口座　東京74590番
編集・発行人　飯田宗一郎
製作　中央公論事業出版

現代社会と法
——法的なもののみかた——

東京大学名誉教授
川島武宜

現代社会は、法律問題が新聞紙上に載らない日はないくらい山積している一方では、最近一〇年間における日本は経済的、社会的かつ思想的に急速な変化をしており、従来の法律を新しい状況に調整（adjustment）する必要にせまられています。それは、国際法にしても公害の問題にしても、実は今までの法のメカニズムが不十分であり、最近、とくにそれが顕著になってきたということです。それぞれの法律の問題は、個別的には異なりますが、共通する根本的な問題点を、今回のセミナーで行なわれる国際法と公害問題に焦点を置いて提起し、私の見解をお話ししたいと思います。

第一は紛争解決の手段としての法という側面であり、第二は政治権力をコントロールする手段としての法という側面です。

第一の点について、まず「紛争」とは何かを考えなければなりません。紛争にはconflictとdisputeとがあります。政治学、その他の分野では、従来厳密に区別して使われておらず、通常はconflictという概念で全部処理してきたわけですが、私は法社会学の立場からこれを区別したい。

ここにAとBの二人がいて、Aの行為が結果としてBの欲求を満たせないという場を考える。心理学ではその状態を問題にしてconflictを用いますが、法律はもう一段先の問題を考えます。つまりBがAに対して自分の欲求を満足させるためにある行為を要求する段階を私はdisputeと言いたい。もしもAがBの要求通りの行為をすればdisputeはここで終わり、Aがそのように行為しなければ、そこではじめて法律の問題となるのです。別な言い方をすれば、disputeにならなければ、法律の問題にはならないのです。

では、いったんdisputeになった場合、どのように解決したらよいか。日本型の解決方法は当事者の話し合いです。最後は仲直りをして笑って別れることが道徳的に望ましいという思想があり、交通事故で相手を負傷させた場合、頭を下げて花や菓子折などを持って見舞った人が、誠意を尽くしたとして損害賠償が比較的少なくなるということがあるわけです。

一方、話し合いでは解決できない場合には、例えば暴力団の応援とかあるいは村八分など、何らかの意味での実力行使（social sanction）が行なわれます。私の経験でも交通事故に遇い、警察署の中でやくざに強迫されたことがありますが、われわれはこのように、しょっちゅう実力行使でやられているのです。

しかし、実力行使を野放しにしていては必ず強者が勝つ社会——相手を殺してしまうという解決方法は最も簡単で、国際社会がそうですが——になる。古代ローマ帝国の政治権力が解体してくると、そこへゲルマン民族が侵入し、feud（部族間の物理的実力）が絶えなかった。しかし中世になるとローマ法王、あるいは都市の大僧正が、日曜日における教会前の広場でのfeudを禁じたのが、次第に日曜日だけに限らなくなるという具合いに、人類は序々に実力行使をせばめて、理性と論理による紛争解決をしようと努力してきたのです。中世では、法律とは平和秩序（Friedensordnung）であると考えられ、歴史全体をみると、常に政治権力がその安定をはかるためにつくってきたのです。そして今日の文明社会では、個人の基本的人権を侵害するようなかたちでの実力行使をしてはいけない、というところにまできています。

では、理性と論理による解決——法律による紛争解決の最も発達した形態——とは何かというと、次の三つの要素が考えられます。第一はcontrol of decision making　つまり政治権力が実力行使をする前提として、まず、すべきかどうかのdecision makingを行なうが、それが理性と論理によってコントロールされていることが必要である。そこにおいては、予め与えられた判断規準に従わなければdecision makingはできない。その判断規準こそ法律であり、結局、法律とは政治権力が実力行使するためのdecision makingの基準に関する条項である、と法社会学的に定義することができるわけです。第二はそのような法律があって、はじめて実力行使ができるということ。第三は、legal agent（実力行使をすべきかどうかを判断する人と実力行使をする人を抱括していう）が分化（differentiate）していること。この三つの要素は内的に関連しており、これらの条件が満たされて法律は機能をもちうるのであり、事実上社会のSupportを得られるのです。

次に、第二の側面である権力のコントロールについてですが、従来の法律学、あるいは一般の社会学においては、政治権力が社会をコントロールするということばかりが強調され、法が政治権力をコントロールするという側面はほと

——（2頁につづく）

加藤東京工業大学長理事長に推挙さる

――昭和四七年三月七日理事会決定――

昭和四七年三月七日、丸の内工業クラブにおいて開催した理事会は大浜信泉氏の任期満了後の後任理事長について協議し、茅誠司氏の提案に全員一致の賛成を得て、東京工業大学の加藤六美学長を選任した。同席の加藤氏は就任を承諾され、その抱負を述べ、理事会は新理事長の決意と奉仕に大きな期待を寄せ感謝と激励の拍手をもって応えた。就任は昭和四七年四月一日である。

昭和47年3月7日
於日本工業倶楽部

年度末の理事会で重要案件を決議

出席者　大浜信泉、茅誠司、上代たの、春日井薫、加藤六美、中村哲、宮嶋竜興、村井資長、守屋美賀雄、増田四郎、山内恭彦、正田建次郎、鈴木勝（代理）、飯田宗一郎

1　昭和四六年度経常部収支決算については、年度途中で補正予算を編成したが、結果的にはその必要がなかったような決算になる見込みである。

2　昭和四七年度収支予算編成要領について審議したが、新年度から文部省補助金五〇〇万円が運営費に交付されるので、職員の定昇、ベースアップおよび建物補修費などの支出増を含め、総額六七、三八〇、〇〇〇円になる見込みである。

3　昭和四六年度末特別賞与支出可能の見込みがついたので、本給の半月分支給を決定する。

4　土地買収の借入金は開館五周年記念募金寄付金をもって三月一五日、五九、四一三、六〇〇円を返済することができるので、ここに土地問題は有終の結果をもって解決したことを全員感謝した。

5　開館五周年記念募金の現況
現在約一億円を越しているが昨年のドル価変動後の経済不況のため目標達成にさらに一年募金期間を延長せねばならない。

6　文部省運営費補助金
昭和四七年度より新たに文部省予算に計上さる。本法人経常部予算における画期的な補助金である。学生利用料金の値上げ停止が主たる目的である。

7　「セミナー・ハウス」購読制を新設し、広く読者を募る。郵送料とも年額二〇〇円。従来会員校には教職員配付分として、また千人会員にはニュース・レターとして送っているが、さらに利用する学生や社会人にも読者層を獲得したい。

8　国際学生セミナーの実施
日本万国博記念協会の特別の寄付を得て、急に計画した国際学生セミナーが本年度内の事業として三月末、三日間開催することになる。万博の補助金は約六〇万円の予定。

新たに評議員を推挙

（学識者として）
前文部次官　天城　勲氏

（会員校の教授から）
慶応大学教授　村井　実氏
早稲田大学教授　押村　襄氏

（財界協力者から）
野村証券相談役　奥村綱雄氏
富士銀行会長　岩佐凱実氏
三菱銀行会長　田実　渉氏
三井不動産社長　江戸英雄氏
三菱製鋼社長　中島正樹氏

協力会員校として
三女子大学の加入を歓迎

昭和四七年度より左記の三大学が協力会員校として新たに加入されることとなり、これで会員校は三九校となる。

東京家政学院大学
学長　関口　勲氏
東京家政大学
学長　有光　次郎氏
大妻女子大学
学長　内藤誉三郎氏

（1頁より）

んど無視されてきました。しかし、実はこれこそ法律が政治から分化していることの要素であり、法律が法律たるゆえんであるのです。

例えば王様の命令には絶対服従という未開社会では、法律は政治現象と分離しておらず、政治現象それ自体なわけです。マルキシズムの人々は、私がこの側面を強調すると、マルクスによれば法律は支配階級が被支配階級を搾取するための道具である、と言って反論するのですが、マルクスは法律は政治から分離するという理論的なことに興味を持たなかっただけのことで、法律にこの第二の側面がない、ということを意味しないのです。そして実は、マルクスは民主主義社会においては基本的人権が保障されているので革命運動がやりやすいということを言っており、彼は権力がコントロールされているかいないかを知っていたのです。法律のもつこの側面はきわめて重要であり、先にあげた三つの要素は、同時に権力をコントロールするメカニズムでもあるのです。したがってこれらのことを全部含めると、法律には二重のコントロールがあるということができるのです。

中世以来、幾世紀にわたって権力をコントロールすることのための努力がなされてきましたが、その一つのシステムが法律学です。例えば民法の条文は、素人にはわからないほど非常に精密な表現によって書きあらわされていますが、これらはすべて裁判をコントロールするためなのです。

しかし一面では、法律学は必ずしも権力のコントロールのためばかりに使われたのではありません。legal agentがdecision makingを行なうことは、必然的に「法律に従っている」ことを説明する義務を負わされています。裁判をチェックするためには法律は公開されていなければならず、裁判において理由を書くという条件は非常に重要なことなのです。

第二次大戦ごろまでのわが国の法律学は、明治の裁判制度施行に伴う裁判官および行政官養成の結果、職務遂行のために法律の説明を教えるということにウェイトが置かれた。これが官僚法学といわれるゆえんでありますが、国会の答弁はその意味できわめて興味あるものです。どんな結論でも法律上正しいという説明ができることが優秀な官僚の条件です。

法律学には、確かにこのようなテクニックを教える要素があり、こんなくだらないものは私はやりたくない、ということも結構です。しかし、国民は正しい法律学の知識をもち、誤った法律論の間違いがわかってこそはじめてわれわれは権力のコントロールができるということを忘れてはなりません。

（第44回大学共同セミナー
全体講義の概要、文責編集者）

評議員会・理事会

昭和47年4月25日
於　国立教育会館

昭和四七年度事業計画
昭和四七年度経常部収支予算
理事・監事の選出

出席者　茅誠司、大浜信泉、上代たの、森戸辰男、斉藤勇、村井資長、加藤六美、三輪知雄、清水文彦、鐘ヶ江信光、関口勲、山田良之助、小出廉三、川原栄峰、鈴木皇、白井常、島崎昌代理、相馬勝夫代理、有光次郎代理、佐藤喜一郎、高羅芳光代理

終身理事に

佐藤喜一郎氏を推挙

建設後援会の大黒柱として、創立以来今日まで大学の外側から当セミナー・ハウスの成育を助けられたことは万人の認めるところ、その佐藤喜一郎氏を評議員会は唯一人の大学外の理事として、しかも絶大なるご奉仕に対する感謝の表現として、終身理事に推挙したのである。

なお新たに選出された理事および監事は左の通りである。

理事

一橋大学学長　都留　重人氏
成蹊大学学長　石井　照久氏

監事

東京外国語大学学長　鐘ヶ江信光氏

評議員会で加藤理事長のあいさつ

主なる新年度事業計画

1　日本自転車振興会の補助事業として、テニスコートの補修工事をする。（アンツーカー形式で）
2　開館七周年記念のための庭園と自然遊歩道
2　共同セミナーと国際学生セミナーおよび教員セミナー
4　日立製作所、松下電器産業の現品寄付による冷房設備

昭和四七年度収支予算

文部省が初めて

補助金五〇〇万円を計上

学生の利用料金を値上げしないでもやれるようにという目的で、本年度から運営費として五〇〇万円の補助金が交付されることになったので、職員の給与改善のための人件費増三六〇万円を含めて、前年度比四九〇万円の増額予算となった。問題は前年度の利用者三六、八七六人に対し、本年度は三九、三五〇人を見込んだがその目標に達しないと宿泊料収入の減少が心配される。

千人会

千人会のご入会を感謝します

現在会員
六〇〇人（大学人　四六九人／社会人　一三一人）

第16回報告（申込順）

C　明治大学助教授　田村　光三殿
終身　南方同胞援護会会長　大浜　信泉殿
C　立教大学教授　三宅　義夫殿
B　武蔵工業大学教授　中岡　二郎殿
B　お茶の水女子大学助教授　柏原　啓一殿
C　東京大学教授　吉武　泰水殿
C　上智大学教授　鶴見　和子殿
以上七名

昭和47年度経常部収支予算

▽収入の部

	円
財産収入	500,000
寄付金収入	3,380,000
会員校会費	15,580,000
刊行物収入	30,000
宿舎収入	34,260,000
施設使用料	6,130,000
食堂納付金	1,340,000
国庫補助金	5,000,000
雑収入	1,160,000
合計	67,380,000

▽支出の部

	円
人件費	40,639,000
需要費	13,861,000
法人諸費	670,000
土地建物費	5,530,000
事業費	4,980,000
予備費	1,700,000
合計	67,380,000

会員からのたより

楠の木の苗は、一〇年ほどで二、三メートルにまですくすくと育ち、春はやわらかな芽ぶきの新緑を、夏は一、二の人に汗を納めさせる木蔭を投げかける。五〇年も経ると根は盛上がり、根元の幹は大人二、三人で囲む太さとなり、高さ一〇メートルとか、二〇メートルに及ぶ亭々たる大樹となる。その枝すそには緑の風をはらみ、一〇人からの人々を緑蔭でおおってその心をいこわせる。大学セミナー・ハウスの五〇年後を見たい。

（九州大学助教授　中島真忠）

◇

今年も恵み豊かに働かせていただきました。神の使命が尚地にあるを感じて努力しています。セミナーのご発展を祈ります。

（下妻少友幼稚園長　福西　基）

◇

セミナー・ハウスのよき働きのために神の祝福を祈ります。

（青山学院大学助教授　守永　誠治）

◇

お祝いのカードをありがとうございました。つごうにより送金がおくれましたことをおわび申し上げます。セミナー・ハウスのご発展を念じつつお礼までに。

（東京教育大学助教授　井原恵治）

寄付金報告

昭和46年12月～47年3月

ご支援を感謝して、拝受いたしました。

〔一般寄付者芳名〕

一、五〇〇円　明治大学　祖父江孝男殿
一、〇〇〇円　青山学院大学　原　ゼミ　殿
一、〇〇〇円　茨城県結城市　湯本　孝　殿
一、〇〇〇円　成蹊大学　宇野ゼミ　殿
三、八八五円　東京大学　松尾ゼミ　殿

〔指定寄付者芳名〕

〈植樹基金〉
一、二四〇円　上智大学　宇野ゼミ　殿
一、六〇一円　第四四回大学共同セミナー殿
四、二〇〇円　第四五回大学共同セミナー殿
二八、九五〇円　第四六回大学共同セミナー殿
六、一〇〇円　国際学生セミナー殿

〈図書購入基金〉
一、〇〇〇円　成蹊大学生　加藤　哲夫殿

〈現物寄付〉
はなの木（愛知県の県木）
明治大学総長　春日井　薫殿

第43回 大学共同セミナー

主題　人間解放――サイコパソロジカルアプローチ――

期日　昭和46年12月17～19日

〈全体講義〉
精神分析と現代人
立教大学教授　早坂泰次郎氏

〈セクション演習〉
A　象徴と創造
天理大学教授　河合　隼雄氏
B　成長・独立・自由
――新フロイト派の主張――
近藤クリニック院長　近藤　章久氏
C　エロスと変革
横浜市交通局友愛病院
神経科医師　安田　一郎氏
D　夢と実存
――現象学的人間理解のために――
電気通信大学教授　小見山実氏
E　構造主義と精神分析
東京医科歯科大学助教授　小田　晋氏

〈運営委員〉
中央大学教授　世良　正利氏
法政大学教授　佐藤　毅氏

〈参加学生〉
一一三名（うち女子五七名）
津田塾大(一二)、東女大(一二)、早大(一一)、東教大(七)、一橋大(五)、中大(五)、日女大(四)、埼玉大(四)、信州大(三)、慶大(三)、上智大(三)、明学大(三)、東洋大(三)、日大(三)、東大(二)、都立大(二)大阪市大(二)、立大(二)、成蹊大(二)、東経大(二)、聖路加看大(二)、東外大、お茶の水女大、横浜国大、電通大、名古屋大、千葉大、神奈川県立外語短大、共立女大、専修大、青学大、国学院大、昭和女大、ICU、光華女短大、麗沢大、星薬科大、清泉女大、東京農大、和光大各一名、その他一名。（四一大学）

〈主題の主旨〉
自由は人間にとって常に大きな夢であるが、人間解放はまさに自由を実現し、保証する過程だと言えよう。

歴史上で人間の解放という問題に取り組んだ人は多いが、中でもフロイトとマルクスは、それぞれ人間の精神、心理的側面において、または経済、歴史的側面において、互いに他に影響を及ぼしつつ発展させ、現代社会に巨大な影響を与えていることは周知の事実である。人間解放の統一理論はいまだ確立されていないが、フロイトやマルクス以後における社会思想家や哲学者によっても、その確立の歩みが着実に続けられている。いくつかの側面からの探究がようやく全体として一つの体系を形成していくかに見えるこの時点で、これらの学問の潮流を学び、相互の関連を知ることは、若い学生諸君にとって単に知識を広めるということにとどまらず、自らの思想、人生に豊かな経験を与えてくれるものとして大きな意味を持つであろう。このセミナーはフロイト以後現代までの精神分析の発展と多様化を、それぞれの立場から考察しようとするものである。

◇

指導教授には専門職業をもって活躍されている先生方にお願いすることができたので、現実の体験と理論をふまえた熱心な討論を行なうことができたことは、たいへん幸せであった。

企画に当たっては、こうしたテーマに関心のある学生有志の要望を聞きながら、ICUの星野命教授が実現の段階まで推進された。しかしながら同教授がマニラの大学に招かれ出発された直後だったので、運営委員には世良・佐藤両教授が当たられた。

第44回 大学共同セミナー

主題　現代社会と法

期日　昭和47年1月14～16日

〈全体講義〉
法的なもののみかた
東京大学名誉教授　川島武宜氏

〈セクション演習〉
C（前半）国内生活に対する国際法の影響
成蹊大学教授　山本草二氏
（後半）戦争と法
東京大学助教授　筒井若水氏
D　公害問題の法的処理
（前半）
成蹊大学助教授　石川　稔氏
（後半）
成蹊大学教授　谷川　久氏

〈ゲスト〉
元国際基督教大学学長
鵜飼信成氏

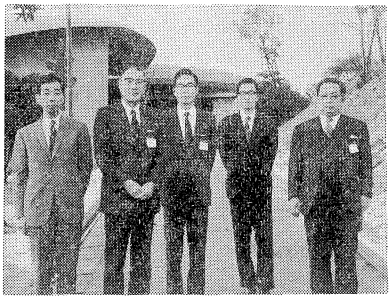
〈参加学生〉二三名（うち女子一二）
津田塾大(六)、成蹊大(四)、早大(三)、ICU(三)、中央大(二)、東女大、東京農大、法政大、星薬科大、千葉敬愛短大各一名。

〈主題の主旨〉
経済や科学技術の急激な発達により、今日のわれわれは、近代社会では未知であった多くの問題に直面している。現代の社会生活はこれまでの秩序をこのような変化に適応させながら、新しい均衡と調和を求めて動いている。こうした動きは国内だけでなく、国際的にも著しい。法もまた、社会生活をコントロールする規範として、この問題に積極的に取り組んでいる。

法は、道徳や宗教や習俗など社会生活の他のルールに比べて、特異な概念と手続きをもっている。とりわけ法の手続きはギリシャ、ローマの古代から長い歴史の試練を経て、それぞれの時代の要請にたくましい適応力を示しながら集積してきた法の概念と論理の成果である。そしてわれわれは、法学を専門としない人たちであっても、日常生活に現われる身近な問題を通して、法的なものの考え方の一端にふれ、法の手続に敬意をもてるようになれば、民主主義社会の主権者としてその責任を賢明に果すことができるであろうと考える。

今回のセミナーでは国際関係、公害問題等を手がかりにして、現代社会における法のはたらきを検討する。このことはまた、法解釈学と法社会学など、法学の基礎理論への導入にもなろう。

――（5頁※印へつづく）



鵜飼信成先生（左から2人目）と指導教授たち

第45回 大学共同セミナー

主題　家を考える
期日　昭和47年2月12～13日

〈全体講義〉
東京大学教授　吉武泰水氏
早稲田大学教授　吉阪隆正氏

〈セクション指導〉
A　客と住居
甲南大学講師　石毛直道氏
B　家事労働とは何か――その経済的意味――
日本女子大学教授　広田寿子氏
C　家と核家族――核家族は普遍的か――
東京都立大学助教授　村武精一氏
D　日本住宅の将来
工学院大学助教授　荻原正三氏

〈参加学生〉
六八名（うち女子三六名）
お茶の水女大（八）、工学院大（七）、ICU（六）、日女大（六）、早大（六）、東教大（四）、横浜国大（四）、慶大（三）、聖心女大（三）、東大（二）、埼玉大（二）、東京家政学院大（二）、津田塾大（二）、武蔵工大（二）、一橋大、共立女大、芝工大、東洋大、明学大、武蔵大、東女大、青学大、東京農大、東海大、千葉敬愛大各一名。

〈主題の主旨〉
〝家〟は、衣食住をはじめ、経済、社会、政治、法律、芸術、宗教、習慣、世界観など、広い意味の文化のあらゆる面に現われている。しかしそれらが、その国、あるいはその地方のフィジカルな〝家〟（住居）の影響を大きく受けていることも見逃せない。すなわち〝家〟は、血縁小社会〝家族〟を意味するとともに、その生活空間としての〝住居〟をも表わしている。戦後から今日に至るまでに、民法改正や核家族化の進行によって〝家族〟は制度の上でも形の上でも一変したが、〝住居〟の方もプレファブによる量産化によって急激に変りつつある。われわれにとってかくも大切な〝住居〟が、このような方法で変っていくことは放ってはおけない問題である。〝家〟はどうあるべきかについて、考えてみたい。

◇　◇

国と時代によって、家の形式とその機能がいかに変化するものかを教えられたのが、このセミナーであった。吉武先生の卓越した企画により、望ましい指導教授の協力が得られ、興味深い討議が展開された。ことにセミナー・ハウスの設計者吉阪教授が全体講義に登場されたり、石毛先生のような関西勢も迎えたり、〝家〟のはたらきを考えるに十分な陣容であった。

第46回 大学共同セミナー

主題　自然界における対称性
期日　昭和47年3月10～12日

〈全体講義〉
東京教育大学学長　宮島龍興氏
A　物理法則の対称性
東京教育大学教授　亀渕　迪氏
C　ガリレイ変換と量子力学
学習院大学教授　江沢　洋氏
D　対称性と遷移金属イオンの色
東京大学物性研究所助教授　菅野　暁氏
E　化学における対称性――分子の三次元的な構造――
早稲田大学助教授　高橋博彰氏

〈参加学生〉
四〇名（うち女子六名）
東教大（四）、お茶の水女大（四）信州大（四）、上智大（四）、学習院大（四）、東京理科大（四）、埼玉大（三）、早大（三）、東大（二）、東工大（二）、東京学芸大、山形大、茨城大、一橋大、立大、慶大各一名（一六大学）。

〈主題の主旨〉
人体は左右対称に近い形をしているが、心臓はたいてい左側にあるし、胃は左から右へいっている。蛙の心臓はまん中にあるそうである。生物体を構成する素材となるアミノ酸は主として左――構造のものであることが知られているが、左に心臓があることと関係があるのだろうか。電流と磁界の関係を示すのに左手や右手の法則があるが、自然法則によって右と左の区別ができるといってよいのだろうか。基礎法則とアミノ酸の左と何かの関係があるのだろうか。

公害が問題とされるほど人間が繁栄したため、近ごろ、人間は学問のために滅亡するのではないかとさえ言われ、科学の罪を問われることもある。しかし、人類が自然探求の心を失ったら、公害は減るかもしれないが、人類の存在さえあぶなくなるのではあるまいか。人間を含めた地球の将来を考えるためには、まず生物発生の問題などから科学的に研究する必要があろう。生物界における左右対称の破れはこれに対して大きな示唆を与えるものにちがいない。

自然の探求には好奇心で刺激された問題の一般性、重要性を考えるのと同時に、その研究に着手する点を発見してゆくことが大切である。このセミナーでは、自然界に広く見られる対称性とその破れとに着目し、それをテーマしてと研究が進められた例を、今回は、手はじめに物理、化学の領域にしぼり、具体的に取り上げて、ケース・スタディをしてみたい。

◇　◇

今回のセミナーは構想から企画まですべて宮島先生が意欲的に推進され実現したもので、先生ご自身、全体講義の他、全期間滞在されて指導に当たられた。今までの共同セミナーは「科学と宗教」、「学問とは何か」といったテーマの中で、自然科学を問題にすることはあっても、人文・社会科学系学生をも対象にして正面から自然科学に取り組んだ専門分野のセミナーはなかったので、意義深い新しい試みであった。予想された通り文科系の学生の参加はきわめて少なかったが、かれらは自然科学的な考え方に触発されたと述べ、また人文・社会科学系との交流を要望するなど充実したセミナーであった。最終日のプログラムには朝永振一郎、山内恭彦両博士を囲む会が組み入れられ、学問との出会い、昔の研究者間の雰囲気などを折り込んだ両先生ならではの科学談論に花が咲き、参加学生は思わぬ収獲を得て大喜びだった。

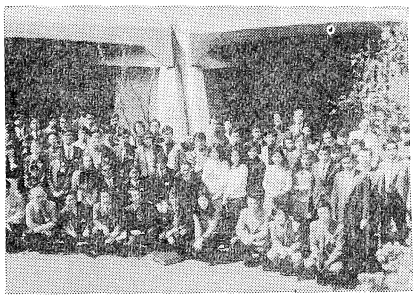
（※4頁から）――――――――

セミナー・ハウスの目的をよく理解されている鵜飼信成先生が、憲法学の権威者としての立場から企画されたので、法律プロパーではあったが、著名な法学者川島武宜先生のすばらしい全体講義によって、現代社会における法のもつ意味を知らされた。

アジアの学生を集めて
初めての国際学生セミナー
JAFSAの協力と万国博基金の援助で

期日　昭和47年3月29～31日
主題　アジアの平和と開発
　　――日本の技術・その歴史的社会的性格

〈主題講演〉
I　日本技術百年の歩み
　松下技研株式会社社長　小池勇二郎氏
II　日本の科学技術の歴史的社会的性格
　朝日新聞論説委員　岸田純之助氏
〈セクション演習〉
A　アジアの経済開発と開発援助
　――とくに日本の役割をめぐって――
　成蹊大学教授　広野　良吉氏
B　近代化と教育
　東京工業大学助教授　原　芳男氏
C　日本の近代化における産業技術の発達
　東京経済大学助教授　内田　星美氏
D　アジアの平和と国際社会
　津田塾大学教授　東　寿太郎氏
〈運営委員〉
　早稲田大学外事課長　山代　昌希氏
　アジア学生文化協会　田中　宏氏
　津田塾大学学生相談室　江尻美穂子氏
　立教大学講師　平木　典子氏
　東京大学学生課長補佐　宮川　清氏


盛況な国際学生セミナー（カラフルな光景）

〈参加学生〉
　六九名（うち女子二四名）
a　国籍別
　日本（四五）、韓国（五）、ベトナム（四）、中華民国（三）、シンガポール（二）、インド（二）、バングラデシュ（二）、マレーシア、セイロン、アフガニスタン、カンボジア、タイ、フィリピン各一名。
b　大学別
　早大（七）、慶大（六）、ICU（六）一橋大（五）、東大（五）、東京外大（五）、お茶の水女大（四）、名大（三）、東京女大（三）、上智大（三）東京農工大（二）、津田塾大（二）、日大（二）、東京理科大（二）、東工大、電通大、埼玉大、東京学芸大、信州大、北大、水産大、京大、大阪大、新潟大、中大、成蹊大、武蔵工大、玉川大各一名。

◇　◇

外国人学生を対象にしたセミナーの実現は、当ハウス開館以来の念願であったが、日本万国博覧会記念協会の基金による補助金が交付されることになり、急きょ実施の運びとなった。企画に当たっては当ハウスが今後国際セミナーとして継続して行なうことができるようなテーマであること、アジアは国際政治における平和勢力として重要な地位を占めていることを考え合わせ「アジアの平和と開発」をテーマに選び、アジア地域留学生を対象とすることに決定した。副題にはかれらが最も関心を抱いていると思われる「日本の技術」を取り上げ、科学技術の側面からだけでなく、経済的社会的側面からも研究し、その歴史的社会的性格を把握することによって、アジアの科学技術の先進国となった日本がいかにしてアジア諸国との連帯を進めていくべきかを考えようとするものである。

セミナーの性格上、留学生の問題意識を的確につかみ、具体化のための細かい配慮が必要であり、募集に際しては各大学の留学生担当課との連絡を密にすることが必要であることなどを考慮し、JAFSA（外国人留学生問題研究会）の協力を得て、山代氏を中心とした運営委員会が組織され、企画から生活指導に至るまでお骨折りいただいた。

開催期日が学年末休暇のため、留学生の募集は思うようにいかなかったが、日本人学生の反響は非常に大きかった。参加学生からはこの種のセミナーの継続を要望する声が圧倒的に多く、三日間の生活を通して国籍を超えた友を得、討論によってつかみとった問題意識を現実の生活の中で持ち続けようとする動きがあることは、文字通り起居を共にし、人格的接触を図りながら、国際的な知的交流を行なうというこのセミナーの目的が、指導者陣から参加学生まで、セミナーを構成した全員の努力によって、かなりの程度、全うされたことを示している。

◈ うれしいニュース ◈

待望の冷房装置
　セミナー室に設けらる
　日立製作所の現品寄贈

せめて勉強の能率があがるようにという念願がかなえられて今夏は快適なセミナー室が実現できることになった。創立以来の募金運動には、いつもご協力くださっている日立製作所から、今回は室内クーラー一〇台の寄贈をうけた。ご支援に感謝したい。

共同セミナー委員会
正副委員長を決定

新年度第一回の共同セミナー委員会は、四月三日、日本工業クラブにおいて一八名出席のもとに開催された。

会議は山内恭彦担当理事を座長に推し、新年度前期の大学共同セミナーの企画を行なった。また、当日は正副委員長を規約によって選出し、次の三委員が決定した。

委員長　川原　栄峰（早大教授）
副委員長
　木村尚三郎（東大助教授）
　根岸　愛子（東京女大教授）

なお、共同セミナーは五月二七・二八日の初回を含め、年間一〇回が計画されている。

大学共同セミナー開催予告

第49回　偶然を考える　7月21～23日
第50回　日本の水問題　9月22～24日
第51回　日本文学の新しい研究方法
　――平家物語を中心として――　10月27～29日
第52回　アジア社会の比較研究
　（開催七周年記念セミナー）　11月17～19日

◈国際学生セミナーに参加して

異なった意見と自由な討論

東京工業大学助教授
原　芳男

七〇年代に入ってからのアジア諸国と日本の関係は、驚くほどの身近かさと遠さによって特徴づけられると思う。その身近かさとは主として地理的近接性や顔立ち、また交通機関の発達によるものであり、遠さは、相互理解の欠如によるものです。アジアからの留学生と日本人学生を集めて開かれた「国際学生セミナー」は、この近くて遠い日本とアジアの関係を知的に理解し、具体的接触を通して溝を埋めようという貴重な試みの一つだと思います。

三日間にたる熱心な討論と共同生活は、参加した人たちが、それぞれに自分がもつ問題意識に従って何ものかを得る機会を提供したことはたしかだと思います。

最終日の全体集会で、日本の「軍国主義」を否定する一人の日本人学生に退場を要求したシンガポールからの学生、またその意見に反対をのべたアフガニスタンの学生、緊張した場面がありました。溝が深いだけに、私たちは、緊張し、興奮せざるをえない立場におかれることも多いと思います。しかし、異った意見の人が、異った意見のままでつきあいということほど、大切なことはないと思います。というのは、異った意見の人が多数いるのではなくて、多分、一人の人の中に異った意見が混在していて、その状態は、自由な討論の中で、よりしっかりした意見に高めることができるからです。

大きな溝をもつ日本とアジアの関係を、政治、経済、社会、技術という多面的な方向から理解することは、大変むずかしい仕事です。理解して実行することは、さらにむずかしいことです。大学セミナー・ハウスでの今度の試みは、セミナー・ハウスにとってもはじめてのことだということですから、不満足な人もあったかもしれませんが、貴重な経験であったと思います。

留学生として初の〝対話の広場〟

国際基督教大学大学院
国際行政学研究科
（韓国）申　熙錫

私は多摩丘陵の美しい自然の中で開かれた国際学生セミナーに参加して、学問と自然と人が三位一体した雰囲気の中で日本と日本人についての新しいイメージを発見した。ここで私は、日本へ留学に来て最初の〝対話の広場〟を持ったと言っても言いすぎではない。実は私の国にもChristian Academy Houseという大学間の学問的交流のための施設があるが、今回このような充実した企画と美しい環境の中で他大学の学生たちと知り合い、学問的な討論を展開できたことは、たいへんうれしいことであった。〝簡素な生活、高き思想〟をモットーとする主催者の方々に心からの感謝の気持を感じた。国際社会の冷戦体制がだんだん解氷ムードに移っている現在「アジアの平和と開発」というテーマはたいへん適当だった。

さて討論の内容について言えばアジア諸国の日本との関係や日本における留学生の問題等がさかんに討論された。日本が第二次世界大戦のあと平和憲法によって、先進国として国際社会に名誉ある地位を占めているという事実は疑う余地がないが、経済の数値が国力測定の全部では決してない。言い換えれば、アジアの平和において日本は国益だけ追求する実利的な外交方針の設定よりは、まずアジアの諸国家に対する歴史的な過去の事実を深く認識し、そこから出発する新しい相互関係でなくてはならぬと思う。

経済大国としての日本が今後開発途上国に対して進取的指導国となり国際政治において平和的勢力として重要な役割を果してほしいとの意見がずいぶん多かった。参加者の構成や先生方のご指導等はたいへんよかったが、欲をいえば討論の過程と結論において学問の道を歩いている学生として、もう少し学問的な具体的なことがなされたらと感じた。実際的に私たちは政策担当者ではないのだから。

公式の討論のあとコニットハウスでの交わりもまた楽しかった。各国の留学生同士が話し合ったり意見をかわしたが、このような汎大学の対話を通じて、学問ばかりでなく人格的接触をはかることは大切な機会だと思うので今後もこのような国際ゼミナーが計画されるようお願いする。また今度の機会を通じセミナー以後にも参加者有志による会合が二〜三回あって相互理解を深めるよう努力していることもあわせて報告したい。

〝相互理解の場〟の誕生

一橋大学経済学部四年
美原　融

七〇年代のアジアとその中における日本の役割という、大きなテーマに真剣に対峙するとき、ぼくらがそこに見出すのは矛盾と混乱と複雑さだけであり、その矛盾を被い隠している平和大国日本の虚像と、その見せかけの繁栄の中に安住しているぼくらの姿だけでしかないようだ。アジアの留学生諸君との三日間の討論や個別的な対話を通じ、ぼくはそう考えた。

彼らの日本に対する、日本人に対する真摯かつ辛辣な批判と要求を耳にするとき、ぼくらは、ぼくら自身のアジアに対する認識不足を今さらながらに感じ、南の立場に立って考えるとしながら、やはり北の人間でしかない自分自身を再発見する。それとともに、南の友が、アジアの友が、われわれのすぐ近くに存在することを痛切に感ぜざるを得なかった。ぼくら自身も彼らと同じエイジアンなのだ。アジアの友とつきることなき話しに耽るとき、ぼくら日本人はアジアの中で、日本の進むべき道を本当に真剣になって考えていかなければならないと思う。

留学生諸君との真剣な対話、全人格的な接触――もちろんそこには壁がある。言語の壁、人種の壁、イデオロギーの壁。しかし、このような障害は、ぼくら若い世代にとっては乗りこえるべき存在以外のなにものでもなかった。三日間の間、白熱した討論が留学生と日本人学生との間でなされたし、毎晩演習後も寝る時間をさいて討論したり、徹夜で話し合ったセクションもあったくらいである。

だが、三日という短い期間からは、なんの結論もでてこない。結論はでなかったにせよ、このセミナーは参加者の一人一人に大きな問題提起を投げつけたようである。だから、このセミナーで得た討論の場を何とかして持ち続けようという声が、期せずして各セクションからおこったのは当然だったかもしれない。セミナー終了後の今、その芽は現実に動き出している。言語、人種、イデオロギーの壁を超えて討論の場、相互理解の場が生まれたこと。それが本セミナーの最大の収穫のようだ。

第五回大学教員懇談会
――外国語教育の改革を求めて――

期　日　昭和47年1月29～30日
主　題　大学における外国語教育について

国公私立大学教員が共通の場で意見を交換するという目的で行なわれてきたこの懇談会も回を重ねて、大学の中に少しずつではあるがその輪を広げてきている。今回は語学教育を取り上げ、その現状を語学教師と非語学教師の立場から発表してもらい、参加者の討論によって、新しい語学教育の方向を探った。そのため主題講演も両方から最適の先達として朱牟田、坪井両博士が登場され、会の目的達成に多きな効果があった。

わが国では語学＝英語と考えられており、その英語の役割は、戦前の欧米文明の摂取のためから、国際社会におけるコミュニケーションのため、というように戦後は変化してきているが、中学から大学までの英語教育でみるなら、必ずしも時代の要請に対応しているとは言いがたい。「訳偏重」、「マスプロ化による語学教育の困難さ」「専門課程での語学の利用度の低さ」などが指摘されたが、一方では各大学の語学教育の改革も行なわれてきており、東大の「必要度の高い学生に対する少人数の徹底した教育」、都立大の「専門課程での英語の重視」、東工大の「語学相談室の計画」などが発表された。最後に語学教授を低くみる風潮、英語偏重とアジア諸国の外国語の軽視が指摘され、熱心な討論が行なわれ、あらためて指摘された問題点の根の深さが感じられた。

プログラム

〈発題講演〉
大学英語教育学会前会長　朱牟田夏雄氏
語学教育振興会専務理事　坪井　忠二氏

〈シンポジウム〉
第一部　各専門分野の立場から
〔発題〕
津田塾大学教授（国際関係論）　東　寿太郎氏
東京工業大学教授（建築学）　吉見　吉昭氏
東京大学教授（化学）　黒田　晴雄氏
東京教育大学教授（日本文学）　小西　甚一氏
第二部　語学教育担当者の立場から
〔発題〕
●英語
東京大学教授　高村　新一氏
慶応大学助教授　小池　生夫氏
東京都立大学助教授　山田　祥一氏
国際基督教大学助教授　リチャード・ルンディ氏
同　村木　正武氏
東京工業大学教授　安部　勇氏
横浜国立大学助教授　山本　千之氏
●イスパニア語
上智大学助教授　フェリックス・ロボ氏
●ドイツ語
中央大学助教授　小塩　節氏

〈参加者〉　五八名
東工大（八）、東京教育大（六）、東大（五）、中央大（四）、ICU（四）、早大（三）、電通大（三）、東経大（三）、横浜国大（二）、日大（二）、武蔵工大（二）、津田塾大（二）、日本女子大（二）、東京医歯大、都立大、慶大、順天堂大、東洋大、上智大、東京理科大、立大、東京家政学院大、神戸外語大、大学英語教育学会、語学教育振興会各一名。

私の大学生活とセミナー・ハウス
――卒業に際してひとこと――

近藤　雅世

(一)

私が最初にセミナー・ハウスを訪れたのは、入学した年の初夏、新入生歓迎セミナーの折でした。ここでの体験は、それまでの日々の単調さを破り、大学生活への取り組み方を根本的に変えさせてくれた一つの変節点でした。それはなかば感動的なもので、教授を囲む討論では夜の白むのも知らず、善意がよどみなく通る丘にすがすがしい思いがして、初めて大学というものを知ったような気持になったものでした。

しかも、その感動は私一人のものではなく、多くの仲間が共有したようで、それらの仲間はやがて奉仕グループで活動を共にし、テニスコートの整備やら、共同セミナーの雑用、大学セミナー村建設の街頭署名運動など、セミナー・ハウスに少しでも関わっていたいと、微力を尽くしたものでした。

振り返ると数々の思い出が去来しますが、なかでも二年生の秋の自主セミナーは、当初、新しい学生参加の一形態と意気込んでいただけに、感慨深いものがあります。結局、三日間を上を下に駆けめぐった末の結論は、事務処理にしかすぎなかった学生参加のはき違えの反省から、学生のすべきことは蓄積された研究による問題提起であるというものでした。しかし、そこまでたどり着いた私たちは、自己の大学との関わり合い、社会運動体としてのセミナー・ハウスへの疑問などが、学生運動の激化につれて芽生え、より身近かな自分の大学という拠点に、重心を移していったのです。このように、私がセミナー・ハウスに主に関わったのは二年ほどでしたが、共同セミナーや、またそれを契機とする読書会で学んだものも多く、セミナー・ハウスは常に刺激の場として、私の中にありました。そして何よりもセミナー・ハウスが私に与えてくれたものは、さまざまな友人、先輩、後輩であり、その中には互いに励まし合える仲間もできました。

（早稲田大学政治学科卒）

(二)

香月　洋一郎

限られた字数だし、セミナー・ハウスのすばらしい点は他の人が書いてくれると思うから、多少憎まれ口をたたいてみる。といっても、セミナー・ハウスへの批判はそのまま利用者である学生に帰せられるべきだから、これは自分自身の反省でもある。

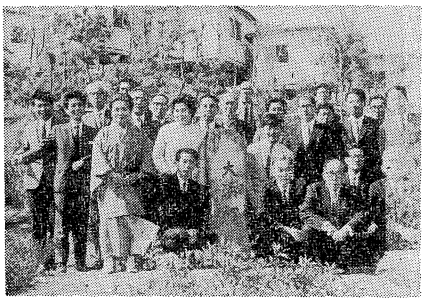
八王子に行けば友人もできるし他大学の先生方と接することができる。なにか得たような気になる。が、せんじつめればそれだけのことじゃないか、という気にもなる。なにか本質的なものが抜けていて、そのくせ言葉だけが先走っているような。「実はテキストを読んでこなかったんです」という発言を実ににこやかに受け入れる先生と学生が多いことに驚いている。そうしてそれに続く会話では「学問」「研究」といった言葉の花ざかりである。悪いというつもりはない。そういった共同セミナーも必要ではある。しかしそれが大半を占めたり、主流となった

――――（9頁へつづく）

サンワみどり基金により〝つつじの丘〟大浜岬公園〟完成

昭和47年3月16日開園

敷地内丘陵の南端、五群の裏側を整地にして庭でもつくろうかと計画していたところに、三和銀行が全国緑化運動に協力して設けたサンワみどり基金より三〇万円の寄付をいただき、この計画は急速に実現した。造園は府中の村越造園にたのみ、少々金額が足りないので、これまでに植樹のためといって寄付してくださった寄付金もこの計画に合流してもらい、さらに昭和四六年一一月七日の開館六周年記念の式典のさいに大浜信泉理事長八〇歳の長寿を祝して贈呈した記念碑、「大浜岬」もこの庭園に立てることに合流し、すばらしいつつじの丘が完成した。



大浜信泉先生と大浜岬石の建立祝い

昭和四三年六月二九日現在のテニスコートが完成し、コートの北側の丘陵の突端に一本の雄松が敷地買収以前からあり、正に付近の風景は海岸の岬を思わせるので、コート開きのテープを切られた大浜信泉先生に感謝し、大浜岬と命名したのであった。この岬がつつじの丘として美化されたこの機会に、記念岬を立て、大浜岬公園となった。

大浜先生を迎えてささやかな開園の集いを催し、共同セミナー委員会のために前日から在泊中の山内恭彦、川原栄峰両先生をはじめ、専修大学の土方先生が御母堂と共に、また日本女子大の岡本先生の研究グループなど多数が参加し、寄付者三和銀行関係を交えて「春につつじが咲いたら、きれいだろうね」という感想を語り合った。セミナー・ハウスの名所が新たに生まれた。構内散歩で大浜岬まで足をのばさねば、セミナー・ハウスに来たことにはならない。

なおこの造園を援助されたゼミナールは左記のとおりである。感謝してお知らせしたい。

共立女子大手塚、明大内田、拓殖大赤松、上智大宇野の各ゼミナール、山梨英和短大、東京YWCA学院家族社会学会、全国高校家庭クラブ、市光工業、共同セミナー参加学生（三二、三四、三六～四二、計九回分）、土方専修大教授の皆さま。

東大図書館研修会の植樹寄贈

薫風のころともなると、利用者の皆さんからいただいた記念樹の緑が、ことさらにあざやかである。

さる四月一四日、田無の東大演習林から広葉杉、モミ、シラカバとダテカンバ、メタセニイヤ、ストロープ松、朝鮮五葉、アメリカハナミズキなどの名木、珍木九本が届けられた。さっそく長期研修館の内庭に植えられ、これまで空地めいた庭がよみがえったように趣きがそなわった。

ことの次第は、三月一一、一二日、当ハウスで東大図書館職員研修会が持たれたさいに発案されたのが、その後具体化したものである。参加職員の皆様がポケットマネーを出しあって講習林から分けてもらったとのことであるが、そのときの研究集会とこの記念植樹は、このたび定年退官された図書館長松田智雄教授の送別の記念ともきいている。

構地内の植林

一昨年買収した土地の最南端にあたる約一〇〇坪ほどの土地を整地するため、群生する丈余のカヤを刈り取って焼く作業が冬から春にかけせっせと進められた。ここに杉、桧それぞれ五〇〇本を植林するための下ごしらえである。

植林は、仕事の前後、慈雨にも恵まれ四月六日無事完了した。

（8頁より）

りすると、一体ここは何だろうという疑問もおこる。

共同セミナーで知りあった仲間の、それ以後の自発的集まりは、ぼくの知る限りではほとんど一年をまたずにすたれていった。これも前述のことと無関係ではない。期間、講師、テキスト、姿勢などの点で新しい形のゼミをあの丘でできないものか、それでずいぶん走りまわったことがある。が、結局は実現できなかった。だからぼく自身、とやかくいう資格はない。ただ、今後のセミナー・ハウスを動かしてゆく責任者は学生であるということは言えよう。

（一橋大学社会学部卒）　小島　泰典

(三)

私が入学した一九六八年は、全国的に学園内が大きく揺れて、既存の価値体系を全面的に否定するといった方向へ進むように思えました。そのような中で、何もわからないなりにも、いろいろな角度から「大学とは何か」ということをクラスの仲間と議論しました。しかし、私にはそうした議論の中味が、どうしても実感として受け取れなかったのです。そのようなとき、大学の勧めで参加したのが新入生歓迎セミナーでした。二泊三日の短い期間ではありましたが、朝から夜遅くまで、先生と一緒に、大学生活の不安や意義を話し合いました。

その後の大学生活の中で「出会いの丘」を文字通り活用し、現在も新入生セミナーのセクションでお世話になった深沢先生に、何かと相談にのっていただいたり、先生のお宅に集まったりしています。また飯田先生からは、私たちが何となくやることに対して、いろいろときびしい小言を受け、一瞬はっとすることがよくあり、たいへん感謝しています。卒業するに当たって、ひとこと、現在のように組織も大きくなってくると、歪みも出てくると思いますが、創設の理念を考えてみてくださることを希望します。

（武蔵大学経済学科卒）　水野　悦子

(四)

初めて参加した新入生歓迎セミナーで受けた感激と刺激は、大学へ入ったからといって、まだ高校時代の延長にすぎなかった私にとって、大学生活の第一歩であったといってよい。人との「出会い」の場であり、学問への触発点でもあった。ところで二年から三年にかけての時期は大学問題の活発なときであり、セミナー・ハウスも創設期から一つの転換期に入ったような気がする。大学とセミナー・ハウス、この二つの基盤に位置する自分自身を両立化し得ず、セミナー・ハウスから少しずつ遠ざかってしまった。だが、そこで出会たった先輩、仲間と、自分の志向（民俗学）は維持し得たし、これからへの可能性も見い出せている。

（日本女子大学史学科卒）

業務通信

本年はいくつかの大学で、学生手帳、便覧、大学新聞などに、セミナー・ハウスの利用方法を書いていただき、ご配慮に感謝しています。会員校あってのセミナー・ハウスですから、今後も交わりを深くしたいと思います。

ついては、申込の手続上、これまで若干、不都合な点がありましたので、本年度から次のように一部改正いたしました。ご了承の上一層のご協力をお願いします。

●予約金

宿泊費、食事代などの概算総額の二〇%

●解約について

やむなく解約される場合には、原則として利用予定期日の一ヵ月前までに限って、予約金の½を返却します。

●違約金

利用予定期日の一ヵ月以内の解約またはこれに準ずる著しい減員があった場合には、総額の三〇%の金額を請求することがありますので、あらかじめご了承願います。

▼交歓会

○クリスマス　12月20日
○七草がゆ　1月7日
○ひなまつり　3月1日・3日

大学間の交歓風景は、この丘の上では、学生のいるところならどこでも見られるが、なんといっても、当ハウスならではの光景が展開するのは、そのときどきの季節の行事にちなんだ食後の交歓会である。たまたまめぐり合わせたゼミナールの人たちは、予期していないキャンディが配られたりすることがあって、ちょっぴり得をする。なかには、当ハウスでの合宿は、毎年クリスマスの交歓会にぶつかり、今度で四回目という慶応大の渡部ゼミもあり、クリスマスはたいへんにぎやかだった。

▼AFS便り

◈拝啓　桜も散りはじめ春もなかばに入ってまいりました。

皆さまますますご健勝のことと存じあげます。

先日、私どもAFSのオリエンテーションにさいしましては、たにへんお世話になり、ありがとうございました。とくに学生一人がけがをした折には、病院の手配やら車の運転やら夜中にお世話いただき、私ども一同たいへんに感謝しております。あのときの学生は、おかげですっかり回復して元気になりました。私どものこうした気持から、お礼としてささやかな贈物をいたしましたので、お受け取りください。

◈私はウェイン・バーンストーンです。私はAFSの学生と大学セミナー・ハウスにきました。あなたは私たちにおくりものをあたえてくださった。どうもありがとうございます。あなたのセミナー・ハウスはたいへんきれいです。

私はボストンからきました。いま東京にいます。さようなら

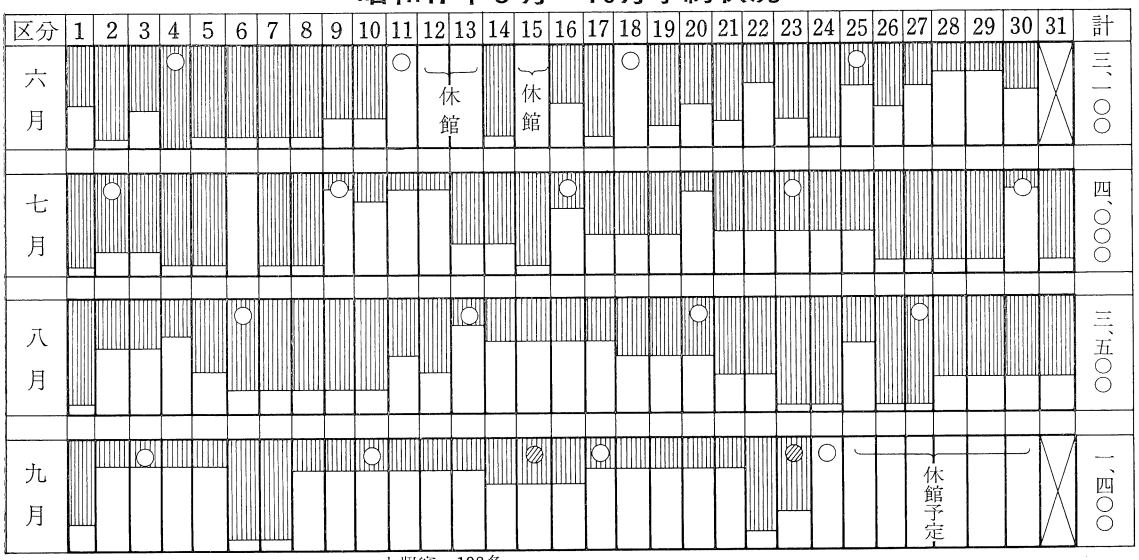
（以上原文のまま）

寄贈図書（昭和46年8月～11月）

『社会学論叢』三号　笠原正成殿
『歴史の研究』一八～二〇巻　佐藤喜一郎殿
『国際問題』一三七～一四四号　日本国際問題研究所殿
『プレリュード序曲』野坂穣殿
『岩波講座　世界歴史』二一、二九、三〇巻　岩波書店殿
『Energy』三〇、三一号『日本文化』エッソスタンダード石油殿
『大学のゼミナール』　本位田祥男殿
『経済体制を越えて』『マルクス経済と現実』『二つの体制と政治経済』『マルクス主義と民主主義』『マルクス経済学入門』　堀江忠男殿
『世界の名著』二六、五八、六二巻　中央公論社殿
『パーチェム・イン・テリス』
『マーテル・エト・マジストラ』
『ポプロールム・プログレシオ』
『フマーネ・ヴィテ』岩浅武雄殿
『生産研究所報』二四、二五号　早稲田大学生産研究所殿
『ファウストゥス博士』　森川和久殿
『岩波理化学辞典』　第三七回大学共同セミナー　プロジェクトリーダー一同殿

昭和47年5月～10月予約状況

47・5・1現在

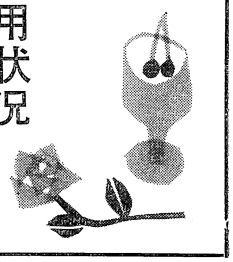


（注）○・◎・●……日・祝祭日
▥……予約済
□……申込受付中

ユニット収容	198名
長期研修館	25
教師館	9
ゲストルーム	7
計	239名

開館以来の宿泊延人員　217,113名
開館以来の宿泊実数　110,918名
（昭47.4.20）

利用状況



◇一二月

慶応義塾大学講師　渡辺　彰
東京工業大学教授　内藤　正
東京都立大学教授　籾井　常喜
日本国際学生協会
青山学院大学助教授　J・スキルマン
東京工業大学産業問題研究会
早稲田大学自動操作研究会
全国地理学大学院生連絡会
東京学芸大学助教授　谷　俊治
横浜国立大学教授　荒　秀
立教大学教授　牛窪　浩
一橋大学体育会
東京都立大学講師　石川　倶通
明治学院大学助教授　久世　了
電気通信大学教授　河村　良吉
都立商科短期大学講師　土肥　裕
早稲田大学助教授　出居　茂
明治学院大学講師　高橋　勇悦
明治学院大学助教授　増田　茂樹
中央大学助教授　松本　正徳
東京都立大学教授　矢野　茂樹
東京都立大学学生部キャンプ　飯塚　鉄雄
早稲田大学教授　染谷恭次郎
早稲田大学助教授　福山　仙樹
上智大学教授　吉田　裕
法政大学英語研究会　三浦　徳弘
小西六写真工業（社内研修）
東洋大学教授　菊浦　重雄
一橋大学教授　片田　信二
立教大学教授　野田　一夫
東京都立大学助教授　石井　昭
一橋大学教授　福田　平
東京工業大学教授　阿武　芳郎
第43回大学共同セミナー
東京女子大学短期大学部教授　川村　輝典
東京工業大学教授　榎本　肇
慶応義塾大学教授　生田　正輝
日本女子大学教授　杉溪　一言
一橋大学教授　鴨　良弼
上智大学学内共同セミナー
A・マタイス
東京女子大学教授　根岸　愛子
慶応義塾大学教授　石坂　厳
東京都立大学助教授　小田中聡樹
慶応義塾大学助教授　日比野真一
白梅学園短大教授　樋口　澄雄
東京都立大学教授　荒木　峻
慶応義塾大学教授　渡部　一郎
杉野女子大学助教授　田村　皖司
専修大学教授　菅井　準一
中央大学郁法会　高窪　利一
上智大学講師　宇野　重昭
東京都立大学教授　赤木須留喜
明治大学教授　祖父江孝男
慶応義塾大学助教授　小野　敏夫
日本大学助教授　榛沢　芳雄
YMCA　丸　純子
東京都立大学教授　岡島　三郎
慶応義塾大学教授　佐藤　豪
横浜国立大学教授　本橋　渥
東京経済大学法学関係教員研究会
文学教育研究者集団　熊谷　孝
明治学院大学教授　佐藤　和男
ICU池亀ゼミ読書会

◇一　月

慶応義塾大学講師　野呂　影男
日本大学教授　関　慎吾
国立音楽大学教授　熊谷　孝
早稲田大学講師　川辺平八郎
武蔵工業大学助教授　桑原　哲郎
日本女子大学助教授　広田　寿子
上智大学講師　長島　正
中央大学講師　沖野　安春
東京都立大学教授　清水　誠
東京経済大学教授　向井　武文
慶応義塾大学講師　柴田　典男
武蔵工業大学教授　西野　忠
東京神学大学教職セミナー
佐藤　敏夫
国立プレス（幹部社員研修）
東京大学教授　諸井勝之助
上智大学講師　小島　慶之
滝野川教会教会学校聖書研究会
日本女子大学教授　遠藤　卓夫
第44回大学共同セミナー
白梅学園短大教授　田中　未来
玉川大学助教授　若槻　泰男
東京大学助教授　菊地　昌典
東邦大学助教授　本吉　修二
東京都立大学助教授　関口　晃
全労金関東地連
日本交通公社教育部
日本ムーディ科学映画協会
東京外国語大学教授　鈴木　幸寿
日本山岳協会
一橋大学数学研究会　小野山卓爾
東京都立大学社会学科研究会
東京都立大学助教授　鈴木　二郎
産業関係研究協会　高田　清朗
玉川大学助教授　彦由　一太
東京大学教授　岡　義達
田村電機相模原事業所
一橋大学助手　菅野　則子
第5回大学教員懇談会
立教大学助教授　大橋　泰二
青山学院大学教授　柴川　林也

◇二　月

青山学院大学教授　原　豊
京王帝都電鉄鉄道教習所
明治学院大学助教授　中山　弘正
早稲田大学生産研究所
中根甚一郎
東京都立大学教授　矢沢　大二
東京都立大学教授　稲垣　寛
千早こどもの家保育園（職員研修）
武蔵工業大学助教授　桑原　哲郎
早稲田大学教授　佐藤　慶幸
慶応義塾大学講師　師岡　孝次
平安教会教師会（社会教育研究会）
東京経済大学助教授　依田　精一
青山学院大学聖歌隊
第45回大学共同セミナー
茨城県立結城第一高等学校
早稲田大学経営情報学会
松田　正一
東京経済大学助教授　松隈　徳仁
東京教育大学助教授　石部　元雄
東京経済大学経済政策研究会
立教大学史学研究会近代ゼミ
青山学院大学教授　古川　栄一
立教大学助教授　大橋　泰二
日野自動車工業（管理者教育）
専修大学教授　桧田　信男
日本交通公社
東京大学教育心理学研究会
東　洋
早稲田大学教授　原田　俊夫
駒沢大学美術部
成蹊大学教授　宇野　重昭
中央大学教授　近藤　圭一
日野協力会（部課長研修会）
日本女子大学ESS
慶応義塾大学福沢先生研究会
職業訓練大学校教授　宗像　元介
全国私立保育園連盟
東京都立大学助手　石井　敏
東京都立大学助手　大石　堪山
都立商科短期大学講師
山岡　熙子
日本国際学生協会　新沢　雄一
早稲田大学教授　園田　義道
東洋大学助教授　志摩　陽伍
東京都立大学教授　保坂敬太郎
上智大学大学院有志読書会
東京都立大学教授　小野　記彦
白梅学園短期大学助手
本間　真宏
東京都立大学教授　金関　寿夫
東京都立大学助教授　桐谷　維
法政大学教授　栢野　晴夫
東京大学職員組合
共同セミナー委員会
東京都立大学助教授　速水佑次郎
東京都立大学教授　石村　善助
日本大学建築研究会　小谷喬之助
明治学院大学助教授　久世　了
慶応義塾大学現代政治学研究会
和光大学助教授　池田　貞雄
大妻女子大学教授　天野　一夫

中央大学法友会　高窪　利一
上智大学独語科クラス
立教大学教授　武沢　信一
日本国際生活体験協会

◇三　月

立教大学教授　牛窪　浩
農村伝道神学校教授　興招　政敏
日本水産（社内研修）
早稲田大学助教授　粟飯原　稔
帝京大学経済研究会
東京女学館短期大学イベロ・アメリカ研究会
日本交通公社
学習院大学助手　世戸　憲治
明治学院大学教授　神保　信一
東京工業大学教授　松田　武彦
日本機械学会関東学生会
都立お茶の水専修職業訓練校
東京大学教授　松尾　孝嶺
株式会社ダイクマ（社員研修）
電気通信大学講師　荻原洋太郎
杉野女子大学助教授　田村　皖司
東京都立大学教授　飯塚　鉄雄
東京外国語大学助教授　岡田　進
東京工業大学助教授　道家　達将
京王プラザホテル（採用教育）
日野自動車工業（管理者教育）
一橋大学助教授　中村　政則
東京学芸大学講師　小町谷照彦
慶応義塾大学講師　野呂　影男
東京キリスト教短期大学教授
ドナルド・E・ホーク
明治学院大学グレゴリーバンド
東大教養学部学生オリエンテーション委員会
東京女子大学助教授
ドナルド・フィーラー
東京都立大学工業化学教室　田辺　良美
東京都立大学教授　鈴木　二郎
東京学芸大学数学科集中講義
第46回大学共同セミナー
東京大学附属図書館研究会
富士通FACOM研究会
青山学院大学卒業生有志
東京都立大学講師　国井　隆弘
東京学芸大学助教授　広川　省吾
日本大学教授　中島　邦男
国学院大学教授　関野　昭一
東大アジア学生友好会
東京女子大学助教授　柏木　恵子
東京都立大学教授　塩田庄兵衛
国際商科大学講師　谷原　修身
青山学院大学教授　宇津木　章
東京スクールオブビジネス講師
飯島　和子
日本女子大学教授　岡本　栄一
国際基督教大学助教授
浦口　節子
共同セミナー委員懇談会
AFSオリエンテーション
学習院大学助手　中村　孔一
慶応義塾大学教授　佐藤　豪
東京大学教授　内田　祥哉
田村電機労働組合
法政大学教授　中川　作一
東京教育大学OZE研究会
語学教育セミナー　松本　享
東京都立大学教授　大羽　滋
東京経済大学助教授　橋口　英俊
政治政経史学会　彦由　一太
東京主僕伝道教会（研修会）
国際経済商学学生協会(AISEC)
慶応義塾大学教授　石坂　巌
明治学院大学吹奏楽団
早稲田大学講師　桧田　信男
上智大学国際関係研究所
鶴見　和子
日本大学教授　安井　久善
全日本学生観光連盟
ビリーグラハム伝道協会（第二回クリスチャン文章教室）
早稲田大学生産研究所
松田　正一
日本特殊鋼（新入社員研修）
日本WFA　林　貞子
新しい絵の会　井手　則雄
東京経済大学文化会
文学教育研究者集団　熊谷　孝
東京都立大学教授　千葉　正士
都立国立高校三年七組同窓会
明治大学学生会会計監査委員会
アスター精機（新入社員教育）
早稲田大学大学院都市計画研究室
吉阪　隆正
明星大学ESS部
専修大学教授　望月　清司
国際学生セミナー
専修大学教授　内田　義彦
東京大学附属病院精神科小児部
上出　弘之
一橋大学中国研究会
東京大学助教授　見田　宗介
新潟市高等学校地理教育研究会
専修大学助教授　吉家　清次
成蹊大学FAC電子計算機研究会
木村　久男

専務理事ノート

新たに東京家政学院、大妻、東京家政の三女子大学を会員校にお迎えできたので、開館七年目の幸先きは上々である。

この丘が緑一色になると、若人の祭典のように各大学の新入生オリエンテーションが行なわれる。バスをつらねてやってくる若人の列を見ながら、どうやらセミナー・ハウスにも葵祭のシーズンがやってきたらしいと、しみじみ思うのである。

運動シャツ姿の加藤理事長が元気なお顔で本館に入ってこられた。あかつきの大気の中を走ってこられたのであろう。週一回は泊られる加藤六美先生の朝の行事である。羨望に堪えない心身の健康ぶりである。大きな空、清い大気、緑の中の小鳥の声――朝起きをしたくなるような環境である。

初夏のストックホルムでは、かけがえのない地球をまもり、人類が生存するためには何をなすべきかを考える国連人間環境会議が開かれる。そして六月末には「日本の再発見」という共同セミナーがこの丘で開講される。

日本は超大国でもなければ、二一世紀は日本の世紀でもない、日本は「ひよわな花」であるとブレジニスキー氏は警告している。「甘え」になれきった日本人の精神構造を、共同セミナーでは土居健郎教授からきけるはずである。いたずらに悲観的な未来を導き出すことを止めて、環境と歴史の変化を克服しながら進歩する日本人を再発見したいものである。

『大学セミナー・ハウス設立の由来――その目的と性格――』と題する小冊子を刊行する。ご希望の方にはご贈呈したい。セミナー・ハウスはどうして建設され、どんな理念で運営されるかといった質問に答えるために、大急ぎで書き上げたものである。いってみれば“Questions and Answers”のようなものである。

セミナー・ハウスの夏は暑いといわれるのが、私にとっては何よりつらいことであった。成長率の早い樹種を選び、植え、木蔭をつくることを考えた。それが立派に成長して各群には緑の並木小路ができ、そよ風が吹くようになった。

暖房のことは創立のときに考えたが、当時は冷房の設備まで考えるほどの生活条件になかった。しかし開館七年、経済生活は向上し、利用者は冷房設備を求めるようになった。私はひそかに今年の夏は冷房設備をしたいものと決意した。幸いに七つのセミナー室は日立製作所の寄付で、教師館の二室は松下電器の寄付によってその願望を達することができた。暑がり屋の先生や学生も心配しないでお出かけください。

松下、日立の両社に深謝したい。創立以来引続いてのご好意を永く記憶しなければならない。